シャルル＝ルイ・フィリップ『小さな町で』に見る死生観

東　海　麻　衣　子

はじめに

1910年11月5日，サロン・ドトンヌにて，アンドレ・ジッドは生涯の友であったシャルル＝ルイ・フィリップ (1874-1909) についての講演を行い，以下のように述べている。

> A ceux dont l'impertinence voulait voir dans *Marie Donadieu* et dans *Croquignole* une régression sur *Bubu* et le *Père Perdrix*, je ne puis qu'opposer les *Nouvelles* que Philippe donnait au *Matin*, en même temps qu'il préparait *Charles Blanchard*. Elles sont aussi parfaites et aussi réussies qu'autre œuvre de Philippe, certes plus réussies dans leur genre que *Croquignole* et que *Marie Donadieu*. Jamais Philippe ne s'est trouvé en plus belle possession de ses moyens. Pourquoi ceux qui l'ont approché de plus près dans les derniers temps de sa vie ne mettent-ils pas ces Contes en plus haut rang dans son œuvre ? [1)]

ここでジッドが高く評価している「これらの短篇」とは，1908年9月6日から1909年9月23日までフィリップが大手日刊紙 *Le Matin* に連載していた短篇のことである。

フィリップは，同郷の友ジャン・ジロドゥーから依頼されたこの連載を，その高額な報酬に惹かれて引き受けた。しかしそれは決して金銭目当ての手抜き仕事とはならず，*Le Matin* 紙の読者は，ほぼ一年に亙り，フィリップが渾身の力を込めて描く珠玉の短篇を目にすることになる。そして，連載が終了したその約3ヶ月後，フィリップは病に倒れ，35歳という若さでこの世を去った。

フィリップの死後，「これらの短篇」は『小さな町で』*Dans la Petite Ville* (1910年) と『朝のコント』*Contes du Matin* (1916年) という2つの短篇集として出版さ

れる。その際，前者に関しては，フィリップ自身による入念な編集作業が生前完了していた。父へのオマージュである『シャルル・ブランシャール』*Charles Blanchard* の執筆を断念したあと，フィリップは死に至るまで，『小さな町で』に収める作品選びや配列，および文章の推敲に余念がなかったという。フィリップは，*Le Matin* 紙に発表した全 50 篇の短篇（うち 48 篇が書き下ろし）の中から，故郷セリイを舞台とした 26 篇を選び出したあと，別の雑誌に発表していた 2 篇を加え，さらにそれを大まかなテーマ別に並べ換えた。1916 年に出版される『朝のコント』は，このとき『小さな町で』に含まれなかった短篇を，のちの出版者が *Le Matin* 紙での発表順に並べて編纂したものである。

こうしたことから我々は，1910 年 7 月に出版された『小さな町で』をフィリップ最後の作品と考えるのだが，では，最後の作品に彼が描いたものとは，一体何だったのであろうか。

フィリップは生涯，セリイとパリを舞台とし，「貧しき人々」« pauvres gens » を描き続けた。そして，『小さな町で』において描いたのもまた，セリイという舞台であり，「貧しき人々」の姿であった。

我々は本論文において，フィリップが『小さな町で』において描く「貧しき人々」の生と死について考えてみたい。彼らはいかにして生き，そして死んでいくのか。

なおその際，彼らの子供たちは対象外とする。子供たちを描いた作品は全 28 篇中 9 篇にのぼるのだが，始められたばかりの彼らの人生と，年齢を重ねて，それぞれの死生観をもつに至った大人たちの人生とを同列に論じることはできないからだ。

本論文の目的は，「貧しき人々」の死生観とその源泉を探ることにある。それによって，『小さな町で』の特異性を明らかにしていきたい。

I 生

まず，「貧しき人々」の生に対する態度，生き方について見ていく。その代表例の一つとして，短篇集の冒頭を飾る『帰宅』*Le Retour* を取り上げたい。

『帰宅』は，ある夜，4 年前に妻と 3 人の子供を置いて家出をしたラルマンジャ

が「帰宅」するところから始まる。ラルマンジャが，おずおずと戸を叩き，家に入ってくると，4年ぶりに帰ってきた夫を迎えて，妻のアレクサンドリーヌは泣き出す。二人の幼児は，ラルマンジャのことを父親だと気付かずに遊び続けるが，13歳になる長女は，父親が帰ってきたと喜び，ラルマンジャに飛びつく。

こうして愁嘆場の準備が整ったところに，もう一人の男，大工のバティスト・ロンデが入ってくる。そこで，ラルマンジャは，昔からよく知っているバティストがすでに自分の地位を奪ってしまったのだということ，自分にはもはや夫の座も，父親の座も，残されていないということを，一目で理解する。そして，お互いよく知った仲のラルマンジャとバティストは，すぐに打ち解けて，会話を交わし始める。

Larmingeat dit :

— Crois-tu que j'en ai fait une boulette !

Baptiste Rondet s'expliqua à son tour :

— Dame ! moi, mon vieux, j'avais perdu ma femme.

— Ah ! elle est morte, cette pauvre Adèle ?

— Oui, et puis je te réponds que ç'a été vite fait. Une fluxion de poitrine, en trois jours. J'avais perdu l'habitude d'être tout seul. C'est une bonne femme, ta femme !

— Moi, que veux-tu, j'avais tellement de dettes, et puis plus d'ouvrage. J'ai pensé qu'il n'y avait pas besoin d'un soûlaud à la maison. Je suis parti, soi-disant pour aller chercher de l'embauche. Mais j'aurais bien pu lui écrire.

— Oui, c'est au bout de trois mois qu'elle a compris que tu l'avais quittée. Enfin, chacun ses défauts ! (p.17)[2)]

そして，自分は戻って来なかった方がよかったのではないか，とたずねるラルマンジャに対して，バティストは，次のように答える。

— Que veux-tu! Il fallait bien que tu saches ce qu'étaient devenus ta femme et tes enfants. (p.17)

やがて泣きやみ，落ち着いたアレクサンドリーヌは食事の支度を始め，ラルマンジャは客の立場で食卓を囲む。そして夜も更け，子供は寝につく。下の二人は，ラルマンジャがあげた小遣いを「おじちゃん，ありがとう。」と言って受け取るだけだったが，長女のアントワネットは，ラルマンジャに飛びつき，「帰らないで！」と泣き叫ぶ。抱きつかれたラルマンジャと共に，アレクサンドリーヌもバティストも涙を流す。しかし，ラルマンジャは帰らなければならない。そしてとうとうラルマンジャが去るべきときが訪れ，アレクサンドリーヌは言う。

— Dame, tu n'avais qu'à ne pas partir la première fois. Que veux-tu, moi je me suis arrangée. Je ne peux pourtant pas me marier et me démarier tout le temps.

(p.20)

こうして，ラルマンジャは，アレクサンドリーヌとバティストに見送られ，再び家を後にする。

わずか6ページの短い話である。

しかしこれだけのなかになんと人生が描かれていることだろうか。

借金や無職で身動きがとれなくなり，妻と子を捨てて家から逃げ出した男。夫がいつかは戻ってくるのではないかと思いつつも再婚した女。先妻に先立たれ，友人の妻と新たな世帯をもったもう一人の男。

わずか6ページ，たった一場面のなかに我々は3つの人生を見るのだが，あまりにも淡々と進み，あっけなく終わる話を前に，ここに悲劇を見ているのだということを忘れてしまう。

『小さな町で』においては，悲劇的な事件，まさしく人生の一大事が，ありふれた日常のように語られる。そして，その基調を成すものとして，我々は，引用下線部にある « que veux-tu » という態度を指摘したいと思う。

« que veux-tu » とは，「ほかにどうすればいいと言うんだ。」というニュアンスの言葉である。まさしく，登場人物それぞれに « que veux-tu » という事情があり，

それぞれ現状を受け入れるしかないという立場に置かれている。つまり，バティストには先妻に死なれ，一人では生活できないという事情があり，もはやアレクサンドリーヌとの新しい生活を手放すことはできないという現状がある。アレクサンドリーヌには，夫に逃げられ，子供を養っていかなければいけないという事情があり，「しょっちゅう一緒になったり離れたりするわけにもいかない」という現状がある。そして，ラルマンジャは，こうした二人の事情を前にして，自分の身勝手から家を出ていったという事情を引っ込め，もはや家庭には戻れないという現状を受け入れるしかないのである。

彼らは，人生を複雑にはしない。バティストが身を引いたり，アレクサンドリーヌがバティストと別れて再びラルマンジャを受け入れたり，ラルマンジャがもとの生活を取り戻そうと食い下がったりするようなややこしいことはしない。彼らはあらゆる可能性を探ろうとはしない。彼らは現状を受け入れることで，人生を単純化しているのである。

フィリップ研究者のディヴィット・ローは，この「単純さ」を「抽象的に考えることができない」という言葉で表現している。そして，それはフィリップの描く「貧しき人々」に等しく見られる特徴であると指摘し，こうした「洗練されていない」人々の心理を描くために，フィリップは，19 世紀の短篇の主流であった 1 人称ではなく，3 人称を選んだのだと分析している [3)]。

彼ら「貧しき人々」は，たしかに洗練されているとは言えない。彼らは，複雑な心の襞も言葉ももってはいない。そんなものは，彼らの人生をさらに困難なものにするだけなのだ。

こうした「単純さ」が，前述した « que veux-tu » という言葉を引き出す。見ず知らずの道路工夫たちに結婚相手を紹介してもらうギャゼ (*La Demande en mariage*) も，自分の人のよさを悔やみ，信者に意地悪く接する司祭 (*La pièce du pape*) も，妻を殺してしまったことから，子供を残して家を後にするルウロー (*Après le crime*) も，問題の大小にかかわらず，彼らがくよくよと思い煩ったりすることはない。« que veux-tu » と割り切り，さっさとそこにある解決を取り上げるのだ。

では，物乞いをして生きるサンテュレル爺さんと婆さんはどうだろうか。次

に，『ふたりの乞食』*Les deux mendiants* を見てみよう。

> Ils s'étaient faits à leur sort, quoiqu'ils fussent mendiants ; ils n'étaient pas plus malheureux que d'autres, puisqu'ils trouvaient encore le moyen de vivre.
>
> (p.113)

運命を受け入れ，生きる手段として乞食であることを選んでいるサンテュレル爺さんと婆さん。しかし，ある日のこと，爺さんは婆さんを残して死んでしまう。すると，独りになった婆さんは，物乞いをやめ，家政婦などの仕事をして生きていこうと決心する。

> Mais enfin, puisqu'elle n'était pas infirme, elle n'avait pas le droit de demander l'aumône. Si elle l'avait fait jusqu'alors, c'est parce qu'elle avait une raison : son mari était aveugle. Comment eût-elle pu se comporter autrement ? (p.115)

夫が盲目であること，それによって物乞いをして生きなければいけないこと，そうした不幸を嘆いても仕方がない。もし誰かにその生き方を憐れまれたり，非難されたりしたとしたら，婆さんが返す言葉は « que veux-tu » でしかなかっただろう。しかしいまや，爺さんは死んでしまった。夫に先立たれたまだ働ける婆さんには，もはや物乞いをする資格はなく，婆さんは物乞い以外の生き方を探さなければならない。こうして婆さんは，また新たな運命を受け入れていくのである。

我々の目には複雑に映る物事を，小さな町に生きる「貧しき人々」は一刀両断に片付ける。« que veux-tu » と開き直ることが，困難な生を乗り切るために彼らが選ぶ，ぎりぎりの手段なのである。

II 死

では，死に対してはどうだろうか。人生をありのままに受け入れ，物事を単純に考えることによって生き抜いていく「貧しき人々」は，死をどのように捉

えているのだろうか。死をテーマとした作品は『小さな町で』において多く見られるが，我々は，死を真っ向からとらえた作品『自殺未遂』*Le Suicide manqué* を例に挙げてみたい。

『自殺未遂』は，病気になり，木靴職人として働けなくなったラティエ爺さんが，水に飛び込んで，自殺をはかろうとする話である。

ラティエ爺さんは，働けなくなったときには，どうすればいいかを知っていた。というのも，ラティエ爺さんの前に，何人もの老人たちがその道筋を示してきたからだ。リューマチに罹って木靴をつくれなくなったロメ爺さんは身投げをし，足が弱って日雇いの仕事に出られなくなったラランドは首を吊り，床についた木工職人のデュラントンはピストル自殺をして命を絶った。

そこで，ラティエ爺さんは以下のように考える。

> — Je ne suis pas plus malin que les autres. Je ne trouverai pas mieux qu'ils ont trouvé. En voilà déjà trois ; s'ils se sont tués, c'est parce qu'il n'est pas possible d'agir autrement. (p.69)

家を出たラティエ爺さんは，階段で転んで隣人にうるさいと文句を言われたり，散歩して時間を潰したりした後，ようやく水の中に飛び込む。けれども，泳ぎを知っていたラティエ爺さんは，自然と水をかいて，助かってしまうのである。そして思わず，「いやあ，危ないところだった！」とつぶやき，ずぶぬれのまま帰途につく。こうして死にそこなったラティエ爺さんは，翌朝目覚めて，「またやり直しか。昨日死んでいたら，今日はもう楽になれていたのに。」と独りごちるのである。そして，そんなラティエ爺さんを，語り手は次のように描写する。

> Il en était encore comme avant ce qu'il appelait son accident. Il fallait passer par là, pourtant, il n'y avait pas moyen d'agir autrement. (p.72)

こうして，さらに逡巡を重ねるラティエ爺さんを一人残して，物語は終わるのだが，ここで上記引用の下線部を見てみよう。「ほかにしようがないのだから。」

とあって，死ぬよりほかに手段がないことが述べられている。しかし，働けなくなった老人に残された道は自殺しかないなどということがあるだろうか。もちろんあるはずがない。以下の文章がそれを示している。

> Il y aurait bien eu un moyen pour ne pas les imiter : se faire inscrire au bureau de charité. Mais c'est un autre genre d'existence. Et, à soixante-quatre ans, quand on a arrangé sa vie d'une certaine façon, il est difficile de changer ses habitudes.
>
> (p.69)

生に対して見られた « que veux-tu » という態度は，このように，死に対しても見られる。働けなくなったらほかにどうすればいいというんだ，死ぬしかないではないか，というのが，彼らの死に対する態度である。たしかに養老院に入ったり，子供たちの世話になったりして，生き延びる方法はいくらでもあるだろう。しかし「それは別の生き方」なのである。彼らは生に対してそうであるように，死に対しても，« que veux-tu » という態度を貫き，「別の生き方」を選ぶくらいなら，死を選ぶという解決を選択しているのである。

次にもう一つの例として，労働者ボネの生と死を描いた『ある人生』Une vie を見てみよう。

ボネは，結婚もせず食事も切りつめ，ただひたすらに日雇い労働に精を出してきた。60 歳になって貯金もでき，贅沢ができるようになっても仕事を辞めない。身体に痛みをおぼえても，街道の道路工事夫として働き続けるのだ。そして街道が完成する前に死ぬのだが，語り手はそこで次のように述べる。

> Il eut la chance de mourir avant d'être incapable de travailler. (p.106)

一生を働きづめに働き，働けなくなる前に死んだボネは「幸せだった」。労働者たちにとって，働けなくなることは死よりもずっとおそろしいことなのだ。労働と生は密接に結びついている。彼らは，自分のパンを自分で稼ぐという生き方しか知らない。それ以外の生き方はなく，他人のパンを食べるくらいなら，

死を選ぶのである。

やはり，「ほかにやりようがない」というのは彼らにとっての真実なのだ。彼らは生に対してそうであるように，死に対しても，可能性を探ることをしない。彼らは死をも含めた人生をありのまま受け入れているのである。

結び

以上，我々は『小さな町で』における « que veux-tu » という生き方，そして死に方を見てきた。では，彼らのこうした死生観は何によるものなのだろうか。

フィリップは，25 歳のときに書いた『母と子』*La Mère et l'enfant* においてすでにその正体を暴いてみせている。以下は，医者の誤った治療のために，さらに病を悪化させ，生涯その後遺症をひきずることになった「僕」の言葉である。

> La résignation des pauvres gens s'étend sous le ciel comme une bête blessée et regarde doucement les choses dont elle ne peut point jouir.
>
> Auprès du médecin, mon mal s'accrut, parce que c'était ma destinée. Il aurait fallu une opération chirurgicale, mais nous n'en voulions à personne, en pensant que nous étions de pauvres gens. Les ouvriers savent que la vie est pénible puisqu'il faut travailler chaque jour et les maladies leur montrent qu'elle est plus pénible encore puisqu'on ne conserve pas toujours cette vie pour laquelle on a travaillé. [...] Nous restons penchés sur nos besognes et nous acceptons les lois naturelles : le travail, les maux et la richesse. Nous disons simplement : Nous n'avons pas de chance. Et c'est la formule dernière de nos cerveaux grâce à laquelle nous pourrions vivre dans le malheur éternel.[4)]

7 歳の「僕」であるフィリップは，医者の無能さと無責任さによって，長期に亙る激しい苦痛と，生涯残る後遺症とを余儀なくされた。しかし，だからといって彼や彼の両親に何ができただろう。的確な治療を受けたり，もしくは誤診した医者を訴えたりすることができるのは金持ちだけである。貧乏人は沈黙するしかない。ただ黙って，運命を受け入れるしかないのである。こうして彼は，「貧しき者のあきらめ」« résignation des pauvres » を身にしみて知った。貧し

き者は，「労働と罪悪と富という自然の法則を，ただ甘んじて受け入れ」ることで，「この永劫の不幸の中にあって，かろうじて生きていけ」るのだということを悟ったのである。

「小さな町」の人々が言う « que veux-tu » とはつまり，「貧しき者のあきらめ」« résignation des pauvres » が言わせる言葉なのだ。そしてそれは与えられた運命をありのままに受けとめて，力強く生き抜くための秘訣なのである。

« que veux-tu » という姿勢で生き，そして死んでいく「貧しき人々」。そしてそんな彼らを，やはり « que veux-tu » という姿勢で描くフィリップ。

彼は，雑誌のインタビューに答え，次のような言葉を残している。

> Le vrai romancier se place en plein milieu de ses personnages : il va de l'intérieur à l'extérieur.[5)]

フィリップは，「貧しき人々」という作中人物と同じ死生観をもって彼らと同化しつつ，小説家として，彼らを「外側」から眺め，客観的に突き放して描く。自由間接話法を駆使したこうした技巧こそが，『小さな町』を軽やかでありながらずっしりと重い，独自の存在感を放つ短篇集にしているのである。

注

＊引用部の下線はすべて筆者による。

1) André GIDE, *Charles-Louis Philippe* (Conférence prononcée au Salon d'automne, le 5 novembre 1910), dans *Œuvres complètes* tome6, Gallimard, 1933, p.164.

2) Charles-Louis PHILIPPE, *Dans la Petite Ville*, Plein Chant, 1997.

同書からの引用については，本文中にページ番号を記した。また，引用部の下線は筆者による。なお，『小さな町で』の邦訳は，山田稔訳を参照した。

3) Comme dans ses romans, Philippe introduit son lecteur dans l'esprit même des petits personnages, qui par certains côtés ressemblent à leurs aînés, notamment dans cette impossibilité où se trouvent toutes les « petites gens » philippiens de penser en abstractions. [...] Face au problème posé par le manque de sophistication des

personnages dont il veut pénétrer les sentiments et les pensées. Philippe évite le récit à la première personne, pourtant très courant parmi les maîtres du conte au 19e siècle.

(下線部筆者)

Biographie écrite par David Roe in *Œuvres complètes de Charle-Louis Philippe*, tome1, Ipomée, 1986, pp.219-220.

4) Charle-Louis PHILIPPE, *La Mère et l'enfant*, Gallimard, 1938, p.84.

5) *Biographie* écrite par David Roe, *op.cit.*, pp.160-161.

La vie et la mort dans *Dans la Petite Ville* de Charles-Louis PHILIPPE

Maiko TOKAI

Dans ce recueil de contes, Philippe raconte des événements tragiques d'un ton simple comme s'il s'agissait de choses banales. Et ses personnages se définissent autour d'une phrase : « que veux-tu », qui semble servir de fond psychologique à leur comportement.

Cette phrase qui revient souvent dans les dialogues dénote leur simplicité : accepter le sort, adopter de plein gré une solution sans envisager toutes les possibilités et ne pas compliquer la situation. C'est pour eux le seul moyen de survivre dans un milieu difficile.

Cette attitude ne change guère vis à vis de la mort. Quand ils ne peuvent plus subvenir à leurs besoins, ils concluent qu' « il n'est pas possible d'agir autrement », et envisagent le suicide.

S'il en est ainsi, d'où provient cette attitude résignée ? Philippe en avait bien décelé la source dans sa troisième œuvre, La Mère et l'enfant. Il s'agit de « la résignation des pauvres gens » à laquelle il était familier depuis son enfance. On peut penser que c'est cette idée qui fait dire aux « pauvres gens » ce « que veux-tu ».

Philippe disait : « Le vrai romancier se place en plein milieu de ses personnages : il va de l'intérieur à l'extérieur ». Cela veut dire que le vrai romancier doit garder le même regard que ses personnages tout en conservant une certaine distance avec eux. Dans ces contes, s'assimilant aux « pauvres gens » avec la même perception de la vie et de la mort, Philippe les décrit avec objectivité.

D'un côté les « pauvres gens » qui vivent et meurent en disant « que veux-tu », et de l'autre Philippe qui les décrit en reprenant leur « que veux-tu ». C'est cette position entre les deux aspects qui donne à l'œuvre un effet particulier, à la fois léger et empreint de gravité.